

「隆夫が和幸のケイちゃんを質屋に入れていたんだ」

それは初耳でした。ケイちゃんとは時計のことです。

「一昨日判ったんだが、隆夫の中学のときの同級生で、今は高校に行っている女の子が、貸した時計を返してくれと言ってきた。もう何ヶ月も前に貸したと言うんだな」

「ホウ、女の子の時計を借りるほど隆夫はもてるのかな」

「ナニ、こわもての方だろう。おどかしたのかもしれない。とにかく姐御がそれを聞いて隆夫に聞いたのだしたら、質屋に入れてもう流れるかもしれないって言うんだ」

「あ、それで昨夜、隆夫は尼崎に帰っていたんだな。しかしひどいね、それは……」

「姐御があわてて今日、質屋へ受け出しに行つて女の子の時計は返したんだが、その質屋に隆夫は和幸の時計も入れていた」

「なんと」

「和幸は、失くしたと思つていたんだな。それが質屋から出て来た。よその女の子の時計だけでなくて、自分の息子まで被害者にされたんだから、松本の姐御も頭にきた。もうカリカリだ。」

「和幸が隆夫に貸して忘れたのかね」

「いや、隆夫が黙って失敬したんだ」

「困った奴だな」

「ひでえ奴だな」

「親方は知ってるのかな」

「そんなこと言つたら、隆夫は半殺しにされちゃうよ」
それから話題は別に変つてしまいました。

しかし、今の話はいつまでも心に残りました。父親の
ない子だけに、これまでもずっと気にかけていたのです。

「オペレーターのこと」

と、指りがけに親部が言いました。

「社長に考えがあるらしいから、もししばらく我慢してくれよ」

親部だけが親方と言わずに社長と言っているのは、つい最近、松本組が会社組織になったからです。

親部は私のために親方に交渉して、暇づけなどで現場へ出られない日を出動扱いにしてくれました。月に三日か四日は休んでいたもので、それは私にとって有難いことでした。

そのことも、その晩の話に出ましたから、彼が私を招いたのは、隆夫の時計一件を告げるためだけではなかつたようです。

多田の現場では、次の給料が何日になるかということが、みんなの最大関心事になっていました。

その年の十一月二十日は日曜でした。

前にも書いたように、松本組の給料日は五日と二十日

でした。定休はその翌日というのも一応の決まりでした。

土方仕事は雨を嫌います。という事は、工の都合では日曜でも休みというわけにもいかないのです。

また給料日の翌日に大きなコンクリ工事の予定があると、給料の支払いは一日延びるといふこともあります。

金を持つと遊びに出て、二、三日はもどらないという者が多いので、親方としては忙しいときの人員確保のためにそういう手段をとらざるを得ないわけです。

ところが今度多田へ来てからは、第一と第三の日曜日を定休日にする国土開発の方から言ってきました。

元請けがそういう方針であれば、それにしたがわなければなりません。しかし、そうすると給料日の翌日が休みという不文律の方が怪しくなってきました。

第一日曜が六日であれば、はなはだ都合です。しかし、十九日が日曜だったら、休みの翌日に給料をもらうことになるので私たちには不都合です。

五日にももらった給料を十九日まで残しておくよりな
「そんな心がけの悪い土方がいるものか」

「パッと使つて、金が無くなったら儲く、それが土方い
りもんやないか」

二十日が日曜なら

「勘定は十九日の夜だろう」

と、一人が予想を立てると

「いや、二十日と決つてゐるから」

と言う者もありますし

「日曜は銀行も閉つてゐるし、松本親方はしつぱいから月曜

になるんと違ひか」

と、したり顔の者もいます。

「それやったら文無しで休めいんか」

と、いきり立つ者もいれば

「いつもらつても翌日が休みさ」

と気楽にかまえる者もあり

「それでは元請けが承知せんやろ」

と心配する者もいます。

揚句は

「岩ちゃん、どないなつてんや」

と私にお鉢が廻つてきますが、私にもわかりません。

平山親父は

「十九日に出るさ」

と断言していますが、尼崎にたしかめたわけではない
ようです。

困ったことに、尼崎では二十日前後に三日ほど続けて

コンクリート工事があるという情報もありましたから、尼崎の給料は延期、多田だけ二十日に支払いになるという事は、松本親方の気性からして考えられません。

が、この飯場の連中は楽家が多くて、日がたつにつれて

「十九日に出るとええなア」

という希望が

「十九日に出るだろう」

という希望的予想になり

「十九日に出るに決まっている」

という断定に変わっていきました。

その十九日がとうとうやって来て、その日は朝から松本親方が多田へ来ました。

「さてこそ、今日給料が出るぞ」

みんな色めき立ちました。親方は例によって厩間に立てじわを寄せていて、取りつく島もないのです。

そして午前中に、さっさと尼崎へ帰ってしまいました。

朝の希望はバラ色でしたが、午後は灰色の失望に変わりました。

そうすると、みんなの仕事ぶりも、投げやりになり、やけくそになつたり、現場全体の空気が重苦しくなつてきます。

こんなとき、土工たちの八ッ当りは弱いところへ吹きつけられますから、一番下っ端の隆夫などはたまつたものではありません。

「早くブルを持って来い」

と怒鳴られ

「愚図愚図するな」

と叱られ

「五センチ削りすぎた」

と、バラスを投げられる有様です。

もっとも、隆夫が下っ端で十七才の少年だからというだけでなく、日頃の隆夫の態度が反感を買っているので、怒鳴られる愚夫に同情する者もありません。

そのうえ、この朝、隆夫は仕事のこと松本親方から叱られています。それでこの日の隆夫はいつもより不貞腐れていましたから、それが仕事にもあらわれて、ますます土工仲間をイライラさせていました。

そんな不愉快な一日がようやく終えようとするころ、

元請けの監督が

「明日は久しぶりの休みだなア」

と、みんなに話しかけました。

「みんなは今夜給料をもらって明日休みだから楽しいだろうが、オレなんか二十五日が給料だからな、明日は文

無しで合宿でアホみたいになってるって寸法だ。黙になる」

土方の一人が答えました。

「わいらかて同じや、今日は給料は出んらしいわ」

「そんなことないだろ。松本さんがさつき、事務所寄って所長から取下げ金を受けとっていただけ」

「ほんまかいな」

「明日は第三日曜でみんな休みだろ。休みに金がなかったら若い衆たちが可哀想だからって、松本さんは所長に言ったんだぜ。だから君たちの給料は今夜ももらえるさ。いい親方もつてうらやましいよ」

みんなの視線が一さへ私に集まりました。

「ほんまか、密ちゃん」

「今夜、給料が出るのか」

私は首を横にふりました。

「オレは何も聞いていないよ。しかし、小原さん(監督)の言い通りなら、飯場に寄って姐さんに金を預けていって、るかもしれないア」

「オイ、そんなら今日は早仕舞いだ」

「おお、今夜はうどんすきで一杯やるか」

「お前は酒よりあっちの方だろ」

みんなの喜ぶ顔を見ながら、私は反対のことを考えていました。

(そんな善はない。松本親方が平山に金を渡すときは、私が立ち合うことになっているのに今日はそれがなかった。だから松本親方は飯場へは寄っていないんじゃないか)

(しかし、もしかすると、ほんとうにもしかすると、親方はある程度の金を飯場へ預けておいて、姐御に預けたかもしれない。それは万が一だけど、ありえないことじゃない。もしそうであればみんなが失望しないですむんだが)

——が、私のそんな思いも、みんなの喜びも、平山親父の戸が一度に叩きふせました。

「松本は金はおいていってらんわい。今夜は給料なしじや」

シーンとなったみんなに、平山は追討ちをかけるように続けた。

「給料は月曜日や、そやから明日も明後日も仕事、休みは火曜日」

言っている本人がいちばん不機嫌でした。

(八)

「昨日はオレ、余計なこと言っちゃったかな」

監督の小原が私の顔を見るなり、そう言いました。

休みの差が仕事となつた日曜の朝です。小原は松本起の休日変更にあわせて日曜出勤して来たのです。

国土開発の出張所には十数人の技術職員がいて、みんな今日は休みですが、小原だけが日曜出勤になつたわけです。

「はいよ、匆にしかなくても。それより日曜出勤させて悪かつたな」

「なに、松本さんと一箇に火曜に休むから同じことだ」私よりずっと年下で独身の小原は、陽気な男でした。

仲間たちは黙々と仕事をしています。給料と休日の延期のことを口に出すものはいりません。

口に出せば、腹立たしさを思い出してしまひからです。黙っていることで失望と不満を心の底におさえこんでいるのです。

それが私にはよく判ります。

仲間たちが腹を立てているのは、給料延滞や、休日変更のことだけではないのも私にはよく判ります。

「オレたちをダシに使いやがつた」

「君方も汚ない。土曜に給料滞りというて国土から金出させて、わいらには遣せへんのや。但て給料は月曜日や」この不満なのです。そしてそれは

「親方はケチ、姫御はもつとケチ」

に、つかがって行くのです。

飯場の仲間たちは、やり切れなさをどこにも持っていないきようがなくて、心中ムシャクシャしています。

今朝もこんな話がありました。

飯場に、まだ泥のついたままの大根が山のようにつんであるのです。

昨夜はさかつたのに、朝から八百屋が来たんだらうか、それにしては早すぎると思ひました。

飯場の朝は早いのです。六時半にはみな起されます。それより早く八百屋が来たとすれば、よほど勤勉な八百屋ということになります。

ちよつと考えられませんか。その大根の山のそばで、池田という若い土工がぼやいていました。

「松浦さんも、益田さんもあんまりや」

ぼやかれている中年の土工二人はニヤニヤ笑っています。

「どうしたんや」

聞いてみると

「昨夜、近くに大根畑がある言ひたら、松浦さんたちが、二、三本抜いてみよう。案内せい言うから……」

三人連れで夜中に出かけると、松浦たちは二、三本どころか、一人がその十倍も引き抜いたといひのです。

はじめはホンのいたずらのつもりだった池田は、他の二人の大胆さにこわくなつてきました。

「もうこの位にしておこりや」

と、止めるのもきかず、松浦たちは一べん飯場へ大根を持って帰ると、二人だけでもう一度出かけたのです。

その戦果(?)が、今朝の大根の山です。

「これやつたら泥坊や。お百姓さんが困るやないか。返しに行こりや」

人の好い池田はベソをかいていますが、二人の中年二人はせせら笑っています。

それがまたおかしいと他の者は大笑いして池田をからかいます。

「姉さん、ミソ汁の実は当分買わんでもええな」

「池田よ、今さら泣いたってお前も同罪や、つかまつたら仲良うブタ箱行きや」

平山姐御も、仕方なしに苦笑しています。

松浦たちは、ふたんでも野荒しぐらいやりかねない連中ですが、リヤカーで運ぶほどの大根を抜いて来たのは、何となく給料延期の腹いせのようにも思えます。

そりいう朝の出来事を思い出してみても、仲間の空気が重苦しくなっているのが判るのです。遠くで平山親父が隘夫を叱っている声が聞こえます。

(またあいつへマをやつたな)

その声を背中に聞きながら、私は小谷監督と現場詰所へ行きました。

種どけの土の冷たさが地下足袋を通して伝わってきます。今日は石垣の丁張りをかける予定です。

「石工はいつから入るのかな」

「段取りさえ決まれば、いつでも来ることになっているよ。飯場に泊りこんでくれるそりだ」

「間地石や、裏詰め、栗石、水抜きのパイプの手配は？」

「水曜日の朝から入るよ」

「ということは、火曜日が休みだから、月曜中に丁張りが出来ていれればいいわけだ」

「丁張りは心配ないけれど、ここは寒いからコンクリが凍らないかな。その方がよっぽど気になるわ」

「うーん、まア大丈夫だろり」

そんなことを話しながら、二人で測量用具をそろえている所へ、いつの間にか隘夫がやって来て、束ねたばかりの測量杭を蹴飛ばしました。

「おいおい、ジロダンはやせよ」

小原が咎めましたが、ジロダンだと思つていたので笑っています。